

小麦新品種「さとのそら」に適した 施肥体系の開発

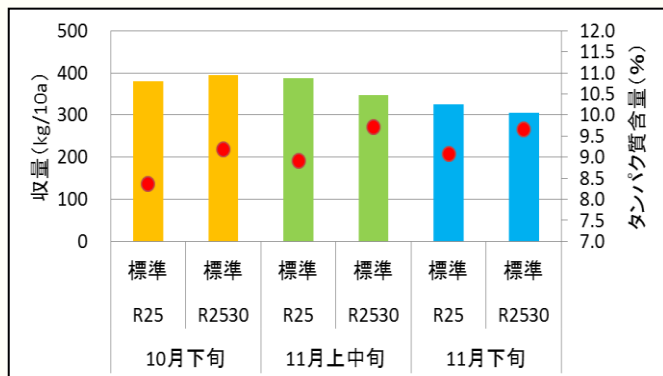
小麦「農林61号」の縞萎縮病被害拡大を受け、新たに「さとのそら」が29年産から作付されます。生育特性の異なる「さとのそら」導入に向けて、安定生産ができる施肥体系の検討が必要でした。

品種が替わっても岐阜県産小麦が実需者から高い評価を受け、生産者もスムーズに新品種に対応できるように、慣行の施肥体系をもとに「さとのそら」に適した施肥体系を開発しました。

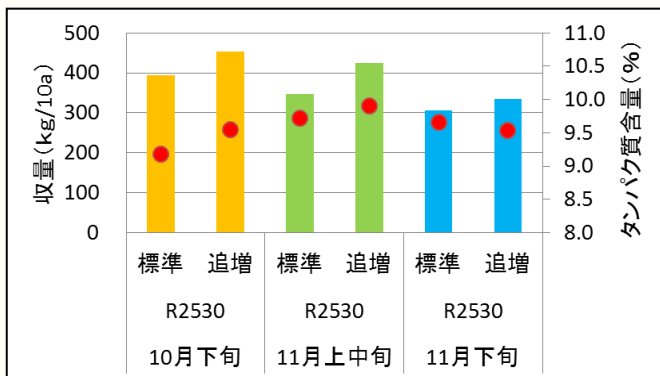


肥料試験の様子

基肥の種類で生育速度が変わります。これが生産物の収量、タンパク質含量に影響してきます。



(基肥N7kg/10a、追肥N3kg/10a)



(基肥N7kg/10a、標準追肥N3kg/10a、増量追肥N5kg/10a)

基肥肥料の違いが「さとのそら」の収量、タンパク質含量に及ぼす影響

追肥量の違いが「さとのそら」の収量、タンパク質含量に及ぼす影響

(研究成果)

- ・慣行のR25に比べて「さとのそら」には窒素溶出が後半に多くなる、R2530の使用でタンパク質含量が高くなりました。
- ・11月上旬までの播種で、R2530を基肥として、追肥量を3kg/10aから5kg/10aと増加することで収量、タンパク質含量が向上しました。

(留意点)

- ・使用した基肥肥料「R2530」は、リニア溶出25日タイプの「セラコートR25」とシグモイド溶出型30日タイプの「セラコートR30」の等量混合肥料で、追肥はNK化成2号を使用しました。